

茅ヶ崎市立浜之郷小学校

研究テーマ：学びあう学びを求めて～教室をひらき、授業をかえる～

1、実践の目的

本校では、子どもの学びを保障するための授業研究を学校運営の中核としている。授業をひらき、授業の中の子どもたちの姿から、同僚の授業から、学びを深めている。

また、全員が授業を公開することは、全校の子どもたちを全員で見て育てるということでもある。授業をひらき、授業で子どもとつながる、授業で同僚とつながることを大切にしている。そこで、「同僚性の構築と自律性の樹立を基盤とした校内研修」を軸に「学校らしい学校」を創造するために研修を続けている。

2、実践の内容

(1) 個人研究テーマ

新年度が始まると、本校ではまず一人一人が個人研究テーマを設定する。個人研究テーマでは、子どもたちと過ごす一年間で自分は何を中心として取り組んでいくのかを考える。柱とする教科領域を決め、その教科領域を中心に専門性を深めていくことに努めている。個人研究テーマは、授業や学級づくりを図る上での自分の軸となり、課題や大切にしていきたいことなど、一人一人の教師としての哲学が込められている。私たちは個人研究テーマを追求していくことで、自分のスタイルを築いていくことをめざしている。

(2) 月例授業研究協議会

本校では毎月1回のペースで月例授業研究協議会（以下、月例研）を行い、全員が年

1回の研究授業を行っている。これは、「すべての子どもを全職員で育てている」という当事者意識の確認や、授業を公開し協議会を経て学んだことを授業に組み入れ、同僚に伝える機会としての意味がある。

研究授業では授業者はすべての子どもの学びを保障し、教科の本質と内容を追求し、「自分らしさ」を探求した授業をひらくようにしている。一方、授業者以外の職員は参観者としての立場となる。授業をじっくり見る機会を大事にし、一つの事実（授業）から多角的視点を持って同僚同士で語りあい、すりあわせる面白さを追求している。また、授業者の思いをくみ取ったり、子どもの学びを見とったりすることで、授業や教材の理解を深め、さらなる可能性を探ることに役立っている。

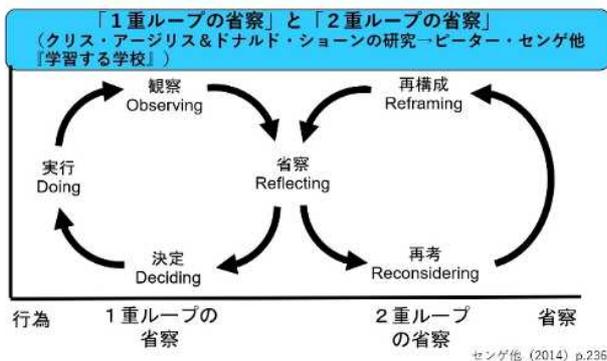
(3) 研究授業、研究協議会の様子

月例研の一例として9月に行った月例研では、2学年図画工作科で子どもたちが身の回りにある物を使ったスタンプ遊びの授業が行われた。本時では、「わくわくスタンプランドをつくろう！」というテーマのもと、グループで一つの作品を制作する活動に取り組んだ。子どもたちはそれぞれに作りたい物を想像しながら色や道具を選び、思い思いに表現していくことができた。また、グループの中でアイディアを出し合ったり、イメージを共有したりしながら取り組む様子も見られた。

研究協議会では、参観者の見とりから、本時の授業の中で活動に取り組めていなかった子どもが数人いたことが分かった。取り

組めなかった理由としては、“ランド”という言葉が足枷になっていたこと、グループの友だちとうまくコミュニケーションがとれなかったこと、自分の中にあるイメージをどう表せばよいのか分からなかったことなどが挙げられた。グループでテーマを共有しながら学びを成立させるためには言葉による交流が必要と思うがあまり、会話によるつながりを重要視してしまったことが、かえって個々の活動の幅を狭める原因となっていた。

また、講師の北田佳子先生（埼玉大学教授）からは、本時の授業をふり返り、省察の重要性について教えていただいた。ただあったことを省察するだけで学びにつながるわけではなく、省察には種類と質がある。1重ループの省察とは予定調和であり、これを繰り返している私たち教師が見たいものしか見なくなるし、聞きたい声しか聞かなくなる。2重ループの省察は、どういう場面でどういう子どもたちに機能しなかったのかを検証することである。研究協議の場では、教師が自分の持論で語るのではなく、子どもの姿から子どもの動きと事実を語る2重ループを募っていくことが大事であり、本校の研修で重要なところであるということを学んだ



3、実践の成果

ここ数年の人事異動で職員が多数入れ替

わったことで経験に差が生まれ、職員間の授業研究に対する温度差を感じるようになった。そこで今年度は、校内研修を運営している研修部を中心に、このような現状をどう乗り越えていけばよいか模索しながら取り組んできた。その取組として「①授業の中で子どもの様子を丁寧に見とること」「②協議会では、見とった子どもの様子（事実）を語ること」というように、月例研に参加する上でのポイントを2つに絞り、全員が同じ視点で取り組めるようにした。このように視点を明確に示したことで、本校に赴任して日が浅い教師たちも、何を手がかりにして月例研に取り組めばよいか分かり、協議会でもつながりを意識した発言がされるようになった。

また、“授業をひらく”ということへの抵抗感がある教師も少なからずいる。その抵抗感や不安を少しでも払拭するため、月例研の授業前には、当該学級の子どもの様子や授業の様子を事前に見合う機会を積極的に設けた。これは本校が大切にしている“授業をひらき、授業で子どもとつながる、授業で同僚とつながる”という原点に立ち返る必要性があると感じたからである。こうした機会を設けたことで、授業や学級の子どもたちに関することについて、学級や学年の垣根を越え、フラットに同僚と交流する様子が見られるようになってきた。

4、今後の展開

今回の実践を通して、改めて原点に立ち返るといふことの重要性を感じた。同僚性の構築という観点からも、今後も学級や学年の垣根を越え、日常的に授業を見合う機会を増やすことで、授業で同僚とつながりながら、互いに学び合う関係性を地道に築いていきたいと考えている。